

2024年度

入学試験問題

国語

50分

1. 受験番号・氏名を解答用紙に書くこと。
2. 受験番号は算用数字で書くこと。(例:123)
3. 鉛筆などの筆記用具・消しゴム以外は使わないこと。
4. 用紙を立てて見ないこと。
5. 質問(印刷不明のところだけ)のある場合、鉛筆などを落とした場合、トイレに行きたくなった場合、気持ちが悪くなった場合は、だまって手をあげること。
6. 解答用紙のみ回収します。

【一】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

正しくあろうとしてしまう態度に次いで、いまの世の中で大事だとされているのは、客観的なものの見方ではないでしょうか。知識も情報も客観的な考えに向かわなければ説得力がありません。だから、「あれはよいがこれは悪い」と人それぞれに唱える際、法律あるいは統計に代表される数値や科学的知見が「客観的事実」として持ちだされます。それらは「これ以上さかのぼることができないような事実」であり、それを参照しさえすれば確実なことが言える、と思われています。しかも、それらは目で確認でき、疑問の余地もないような明確な記述でなければいけません。というのは必ず誰もが「確かにそうだ」と確認できるような「注」可視化」された形でないと客観的な認識は共有されないからです。

客観という言葉が含む厳密さに人は安心します。多様な情報が溢れる時代ならなおさらです。なぜなら「これ以上さかのぼることができないような事実」なので、迷ったときはそこに戻ればよいという安心感を与えてくれるからです。

しかし、この心の落ち着きは曲者です。というのは人間は楽なことが好きだからです。いつかの時点から安堵が高じて「それに寄りかかりさえすれば大丈夫だ」と思い始め、「厳密な事実」を言い訳に使うようになるからです。物事を検証するのではなく、他者を責めるための取り回しのよい道具として扱い始めます。「だから私は正しく、おまえは悪いのだ」と言うために客観性を用いるようになりさえする。

つまり客観的事実から①が生じてしまうわけです。事実がどうであるかよりも、自分が「これが現実だ、これが正しい」と思っていたっている事実のほうが大事になってくる。客観性を物事への問いかけではなく、答えにしたとき、自分が騙されてしまうという「事実」について見えなくなってしまうのです。

誰しも客観的なものの見方を大事にしているけれど、肝心の客観性とはいったい何なのだろう。そういうことについて考えるようになつたきっかけは、戦争体験者への取材でした。

広島と長崎で二回被爆された山口 彌さんという方がいらつしやいました。僕は山口さんの話の聴き取りを行い、自伝『生かされている命——広島・長崎「二重被爆者」、90歳からの証言』（講談社、現在は文庫として『ヒロシマ・ナガサキ 二重被爆』『朝日新聞出版』刊行）としてまとめのお手伝いをしました。

二重被爆した人は一六五人いると推定されています。実際のところどれだけの人が被爆したかは、それこそ客観的なデータがありません

ん。

山口さんは長崎の三菱造船所に製図工として勤めており、出張先の広島で被爆しました。たいへんな火傷を負いながらも、街が壊滅した状況報告と安否を実家に知らせるために長崎に戻り、会社に出勤した直後、再び被爆しました。

話を聞く中で「山口さんに出会えて本当によかった」と思ったことがあります。もちろん稀有な体験をされた方に直に話をうかがえたこともありすが、それだけではありませんでした。

山口さんの話の中に織り込まれた生々しい情感や感性に触れることができた。どれほどの惨事に遭遇しようとも、そのとき自分のできることに努め、ひたすら生きることに向けて歩みを進めてきた。生に徹してきた人の熱を感じられたことが、僕にとって最大の喜びだったのです。でも、その喜びは注し怖気を震うような話を通じて得られたものでした。

一九四五年八月六日の朝、明るい夏の空はいつも通りの日中の暑さを感じさせ、そこに「もうひとつの太陽」と山口さんが表現した原爆の白光が炸裂しました。爆風に吹き飛ばされ、気絶した山口さんが意識を取り戻した後、街を見回すと空の青さはかき消え、一転してのどす黒い空と黒い雨があたりを包んでいました。ひどい火傷を負った山口さんは港近くから街中の会社の寮へと向けて歩き始めたそうです。

夏の夕刻であればまだ明るい。しかし、その日の広島は真つ暗で、焼ける家屋以外の灯りはまったくなくなかったといえます。闇の中、川沿いを歩き続けたところ、向こうからひとりの大人を先頭にした子供の集団がやって来ました。おそらく小学校の教師と生徒たちだと山口さんは見当をつけました。

服と呼べるようなものは身につけておらず、布切れがまとわりついているのみ。幽霊のように手の甲をこちらに向け、指先からは腕の皮膚が手袋のように垂れ下がり、性別も定かではなかったそうです。

「定かではなかった」と言い終えた後、目に留めたひとりの子供について、山口さんは「かろうじて膨らんだ胸で女の子だとわかった」と続けました。そのとき僕は山口さんの眼に映った少女の姿をはっきりと見たのです。

そして、恐ろしいことに彼女たちは「一言も話さず。悲鳴も漏らさず」幽鬼のような格好で、山口さんの右を静かに過ぎ、闇の中へ去って行ったのです。山口さんの左手には川が流れ、燃える街の炎に水面は煌々と照らされ、口々に「熱い」「助けて」と叫ぶ人たちが次々と水の中へ入っては沈んでいき、やがてふかりと浮かぶと流れていった。その様子は「筏のようだった」そうです。

「恐ろしいことに」といったのは、教師と子供たちの集団が一言も発していなかったからです。普通なら映画で見られるような^{注3}阿鼻^{あび}叫喚^{きょうくわん}の姿がリアルだと思つてしまいます。実際のところはそうではありませんでした。^②けれども、だから「恐ろしい」と思つたのではありません。

山口さんは被爆した際、左耳の鼓膜^{こまく}が破れました。史実を客観的に捉えようとする態度からすれば、体力も限界に近づいていた山口さんの「左側の川から聞こえた溺れる人の声というのが、実は右側をすれ違った集団の呻き声^{うめこゑ}だったのではないか」と「実際」の状況を検分し、推論しようとするでしょう。^③でも、それは違うと気づいたのです。

その日の広島の時その場にいたのは、世界中でたったひとり山口さんだけでした。

山口さんが見聞きした以外に世界はなかった。

すれ違う彼女たちは一言も発さず、そして鼓膜の破れた左からは人々の悲鳴が聞こえた。それ以外の世界はなかったのです。

たったひとりで「一言も話さず。悲鳴も漏らさず」に闇へと歩み去る一団を見送つたその眼と耳の澄ませ方に広島で起きた本当の恐ろしさが伝わってきました。

客観的になど語りようのない出来事が本当に起きたのだと、そのとき身震いととも理解しました。むしろ頭ではなく、怖気を震うことのみで把握^{はあく}したのです。

そのときの体感を通じて手渡すしかない事実がそこにあった。僕にできるのは、その断片^{だんぺん}をなんとかつかまえ、文字に焼き付けることでした。

こうしたエピソードから「客観性などあてにならない」とか「結局は主観でしかない」と言いたいわけではありません。^④ひどく混乱した状況を冷静に考える上で客観性はとても重要です。だからこそ思うのは、そんな大事なものを独善的な言動や言い訳といった個人的な事情のために用いる必要はまったくない、ということなのです。

正直なところ、正しくあるうとして客観性を呼び出すことに僕は疲れてはいないでしょうか。

一日の言動を振り返ると、ちゃんとした基準やきちんとしたルールに添えず、「ああ、前もって考えた通りでしなかつた」とか「あれほど言つたのになぜ間違えたのか？」と自他を責めることに忙しい自分を発見できるよう。どれほどのエネルギーを割いても、つ

まるところ自分の正しさと誰かの正しさがあって、すり合わせようとすればするほど逸れていく。思い描いた正しさの数だけ(注4)齟齬が生まれる。客観的に正しくちゃんとしようとすればするほど、正しさをめぐる争いそれ自体は止むことはありません。

おそらく客観性が大事なものは、それが広場のようなものだからで、そこに各人の思う「こういう事実があります」を置いて、その上で話し合える余裕をもたらすためにあるのではないかと思うのです。客観性は決して自分や他人を押さえつける武器ではないのです。

そしてもうひとつ客観をめぐる問題があると、最近とみに感じていることがあります。それは客観性を大事に取り扱うことと、寄りかかることの違いがわからないため、僕らは自信をどんどん失っているということです。

いつしか自分の思いや感覚を他者の価値観と引き比べるようになり、自分が純粹に感じ取ったものを貶めるようになっていきます。正しさは常に自分の外にあると思うならば、自分の感覚とそこから生まれた考えを(注5)スポイルするようになるのは自然の成り行きです。「正解は常に自分の外にある」と思い込むようになって以来、自分の感覚に蓋をするようになってしまったのです。

だから「何かおかしいな」と感じてても、「いやいや、やはり(注6)ファクトがないと」「(注7)エビデンスがはつきりしない限り、何も言えない」と現に自分が率直に感じたことを否定してまで「客観」にこだわるうとするのです。

自分の感覚をもとに考えるよりも、「客観的にはこう考えられる」というモードになってしまふのは、自分の中から生まれた考えよりも、他人に向けた正しさの表明というアリバイづくりを大事にしているからではないでしょうか。そこの正しさは、他人の視線を気にするがゆえの「間違えたことを言えない」程度であり、本当にそうだと心から思っているわけでもない。

自分で考えるほどに正しさから外れるリスクが高まる。なおのこと自分で考えないで済むために、他人事の客観に寄りかかっていく。そうなる活き活きと生きられなくなってしまう。⑤あれこれと迷って生きることを常の姿にしたとき、その瞬間がもう二度と訪れない、同じことの繰り返しがない現実に対し遅れてしか対応できないからです。

僕らの重用している客観は、どうも常に「いま・ここ」で起きている問題を他人事としてよそよそしく捉えてしまうほうに力を発揮しています。いわば、「いま・ここ」にいる生者の世界をわざわざ「この世に足場のない幽霊」の目で捉えようと努力している。自分が現にいま立っている事実を見失ってまで足場のないところを求めてしまう。

いまここで吹く風、いまここで咲く花以外に客観的に吹く風や咲く花があるでしょうか。

世界はいつも退つ引きならない在りようで、本当なら自らの生を他人事にはできないはずです。もしかすると、客観的に語れてしまう「世界一般」というものがある」という考えが多くの不幸の始まりなのかもしれません。その不幸は主観は独善だと戒め、客観性への(注8)信奉をいつしか信仰に格上げし、そうして他人の思考に(注9)隷従し、隷従した同士がいがみ合う、という流れを生み出します。

では、主観的に吹く風も客観的に咲く花もないとしたら、どうやって人はこの世界を知り、語ることができるのでしょうか。

それについての正解を僕は知りません。ただ客観的な正しさに行きつけないから、そこが行き止まりかというと、そんなことはないでしょう。むしろ「正解」を追ってしまうとき、新たな発見はなくなります。

生きているものの眼から見るとは、物事を他人事にする安易さを許さない。「おまえはちゃんと立っているのか。おまえの立っている場所はどこなのだ？」と自らに問い、ハッと我に返るときにのみ世界は姿を表す。それは自分が正しいと客観を盾に独善を掲げるときにはまったく見えません。物事を見るとは、外の知識を通じて見るのではなく、ただ自分が観ることであり、そして見る自分を観ることでもあるのでしょうか。

(尹雄大『やわらかな言葉と体のレッスン』)
問題作成にあたり、表記を改めたところがあります。

(注1) 可視化

目に見えるようにすること。

(注2) 怖気を震う

恐ろしくて体が震えること。

(注3) 阿鼻叫喚

非常にむごたらしい状態のこと。

(注4) 齟齬

物事がくいちがうこと、うまくかみ合わないこと。

(注5) スポイルする

こわす、損ねる、だめにする。

(注6) ファクト

事実。

(注7) エビデンス

証拠、根拠。

(注8) 信奉

かたく信じて従うこと。

(注9) 隷従

他に付き従って言いなりになること。

問一 空欄①に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一般性

イ 厳密性

ウ 消極性

エ 独善性

オ 楽観性

問二 傍線部②「けれども、だから『恐ろしい』と思ったのではありません。」とありますが、筆者はなぜ「恐ろしい」と思ったのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 教師と子供たちの集団の様子が客観的な事実として受け取られるのではなく、彼らに遭遇した山口さんの、その時の体感そのま
まに筆者の中に浮かびあがってきたから。

イ 教師と子供たちの集団が一言も発さなかったという体験談から、山口さんの左耳の鼓膜が破れていたことがより鮮明に伝わって、
原爆の悲惨さを改めて実感できたから。

ウ 教師と子供たちの集団だけでなく、川で溺れて亡くなる人々も見たという生々しい体験談を聞いたことで、筆者も山口さんの経
験をありありと感ずることができたから。

エ 教師と子供たちの集団の様子は想像を絶するほど悲惨なものであり、山口さんが語る原爆の体験は客観的に捉えようとして理解
できるものではないと気付かされたから。

オ 教師と子供たちの集団の様子や行動を、自身もひどいやけどを負って、体力も限界に近づいていた状態でも冷静に観察していた
山口さんの姿勢に強い衝撃を受けたから。

問三 傍線部③「でも、それは違うと気づいたのです。」とありますが、筆者は、山口さんの体験をどのようなものとして受け止めたの
ですか。

問四 傍線部④「ひどく混乱した状況を冷静に考える上で客観性はとても重要です。」とありますが、そう言えるのは筆者が「客観性」
をどのようなものと捉えているからですか。それが分かる一文の最初の五字を抜き出しなさい。(字数には句読点等もふくみます。)

問五 傍線部⑤「あれこれと迷って生きる」とは、どういうことですか。

【二】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

小学六年生の玉田アオイは、席替えで転校生八神カンナの隣になった。カンナが「子ども食堂」と呼ばれる無料の食事施設に入るのを偶然見たことをきっかけに、ふたりは親しくなっていく。「子ども食堂」に頻繁に通うカンナには、厳しい貧困という背景があることも、アオイは分かっていた。一方、感染症流行の影響で、アオイの父の店「玉田カレー」は客が激減し、一時休業を余儀なくされた。家計の悪化、姉の高校受験の問題などが重なり、不安定な日々を過ごすアオイであった。

夏休み中のある日、カンナからアオイに一週間後に祖父のもとに引越すことが唐突に告げられた。急な別れにショックを受けるアオイであったが、一方のカンナは現状からの脱出が可能になったことで、嬉しくてたまらない様子であった。

ちなみにカンナは、以前「玉田カレー」を訪れて、アオイお氣入りの「お子さまカレー」をごちそうされている。

それから、あつという間に木曜日になってしまった。

朝、寝ぼけまなこでキッチンに行くと、お父さんが洗いものの手を止めて、

「アオイ、今日店に行くけど、いっしょに行くか？」

と、きいた。

「えー。何時ごろ？」

めんどくさいなあ、と思った。

お父さんは、休業中のはり紙をしたあとも、ときどき店をのぞきにいく。お母さんに「もったいない」と言われながら、電気もガスも水道も止めていない。

「切っちゃったら、ほんとうにおしまいになりそうだから」

そんなことを言っていた。

でも、わたしをさそつたのは初めてだ。

「何時でもいいよ。アオイも気分転換になるかな、と思つてさ」

実際、わたしはすっかり落ちこんでいた。

カレンダーを見るたびにため息をついて、でもなにもできない。

家にいたつて苦しいだけではあつた。

「じゃあ、十一時ごろに行こ」

「オッケー。じゃあ、その予定で」

お父さんは、また水道の蛇口をひねつてから、思いだしたようにわたしに言った。

「そうだ、洗濯終わつてんだつた。ほしてくるるか？」

「うん、いいけど」

また、めんどくさいな、と思いながら洗面所に行き、洗濯機のフタをあけた。

お金持ちは、乾燥までやつてくれる洗濯機を買うんだろうな。そう思つて、はーつとため息をつく。

お父さんの分まで働く、と息まいていたお母さんはほとんど家にいなくて、夜はクタクタみたいだし、お姉ちゃんも、「塾、減らし
たから、もつとがんばらないと」と、以前にもまして勉強するようになった。いつも（注）スキッパーをききながら、ときどき新曲を口
ずさんでいる。

『ずっとずっと暗やみのなかをかけていた。やつと見えたよ、ひとすじのあかり。あかりのなかにきつとある、ぼくの居場所——』
わたしの居場所は、どこにもない気がした。

十一時になつて、お父さんが「そろそろ行くか」と声をかけてきた。急いで夏休みの宿題をバッグに入れ、店に向かう。
しめきつた店内は、熱気がこもつてムツとしていた。お父さんが窓をあけ、ドアもあけて、風を通す。

「やつぱり店はいいなあ」

そう言つて、うーんとのびをする。

なにが、店はいいなあ、よ。店を再開してから言つてちよーだい——お母さんがここにいたら、きつとそう言う。

お父さんは電気をつけ、窓ガラスをふきはじめた。

しかたなく、わたしも店内のテーブルを全部ふき、おくのテーブルに宿題を広げた。

ノートに日づけを入れ、木曜日、と書いたとたんにドキドキした。

カンナの引っこしは、明日だ……。

もしかして、もう会えないかもしれない。会いにいきたいけれど、家を知らない。それに、きつと準備でいそがしくしているだろう、いきいきと、はりきつて……。

① あーあ、あーあ。

らくがきをしたり、消しゴムをはじいたりしていると、コンコンとドアをたたく音がして、たちまちお父さんの声がひびいた。

「おお、いらつしゃい！」

以前のお客さんかな？ と顔をあげたら、カンナが笑顔で立っていた。

「わっ、カンナ！」

はねるようにして、かけよった。

「休業中つてはつてあつて、あれ？ つて思ってたんだけど、ドアがあいてるし、のぞいたらアオイの頭が見えて」

「わー、会えてよかったー。引っこし、明日なのに、家を知らないから……」

「ありがと。もうね、家はダンボール箱の山。つていうほど、荷物ないけどね」

カンナが、ふふつと軽く笑う。どんよりしているわたしとちがつて、ずいぶんすっきりした顔だった。

お父さんが、わざとか？ つて思うくらいに大きな声で言った。

「カンナちゃんが引っこすからつて、アオイがしよちゃつてさ」

「もう！ よけいなこと言わないでよ」

ほおをプツとふくらませて、きつく言ったのに、お父さんはそれを無視した。

「こんなあまつたれとなかよくしてもらつて、ありがとよ」

「あ、いえ、こちらこそ……」

カンナが店を見回して、「今、休業中なんですか？」ときいた。

「じつは、そうなんだ」

お父さんが頭をかく。カンナがわたしをちらりと見た。② 気まぐずくて、小さくなった。

この前会ったとき、もう休業していたのに、休むかも、としか言えなかった。わたしなりに見栄^{みえ}をはっていたのだ。そんなわたしの気持ちも考えないで、お父さんはべらべらとしやべり続けた。

「カンナちゃんに言うのもなんだけど、お客が減っちゃってね。店をあげた分だけ赤字でさ。けど、あきらめてないよ。またイチからやり直すつもりで、ただいま研究中つてとこかな」

「イチからやり直すつて、うちといっしょですね」

カンナとお父さんが笑顔^かを交^かわす。

「そうだね。おたがいに、まっさらな気持ちで再出発だね」

「再出発できるの？」

わたしは、わざといじわるな言い方をした。

「そりゃあ、わからないけどさ」

お父さんは、けろりとそう答え、「そうだ」と手を打った。

「カンナちゃん。冷凍^{れいとう}したお子さまカレーがあるから、食べてくか？」

「いいんですか？」

「もちろんだよ。店をしめた日に残ったのを冷凍したから味は落ちるけど、ごはんもあるしね。ま、そのへんに座^{すわ}って待っててよ」お父さんがキッチンに入つて、エプロンをつけ、オレンジのバンダナを巻いた。

③それを見ていて鼻のおくがツンとした。毎日、下校時にここにきて、お父さんとふたりですごした時間が、急によみがえってきた。ああ、もう。せっかくカンナが訪ねてきてくれたのに、気持ちが暗いほうへ、暗いほうへと引きずられていく。

それをさとられないように、少しすまして、わたしはカンナと向かいあつた。

カンナがゆつくりと口を開いた。

「あのさ、あたし、明日の朝、九時には出発しちゃうんだ。それで、アオイにだけは会っておきたくて」

わかつていても、心臓がドクンとはねた。

「う、うん。ありがと」

もつと言いたいことがあるはずなのに、頭のなかがまっ白だ。

「わたし、お水入れてくるね」

にげるようにキッチンに行くと、お父さんが、

「アオイ、ついでにカレーも運んでくれるか」

と言った。カレーの入った密閉容器が、電子レンジの光の下で、くるくる回っている。それを見ながら、笑顔でいなくちゃ、と自分に言い聞かせる。

チン！ と高い音がした。

「よし、できたぞ！」

お父さんが、ごはんをお皿にもって、カレーをそえた。それとお水もいっしょにトレーで運ぶ。

「さ、食べよつか」

「ありがと。いただきます」

なぜだか大好きなはずのお子さまカレーが、ちっともおいしくなかった。スプーンでくちやくちやまぜているだけで、なかなか減らない。

でも、カンナは、ぱくり、ぱくりとおいしそうに食べて、スプーンを置いた。

「ごちそうさま。あー、おいしかった。幸せー」

ふわーと胸をそらし、それから両ひじをテーブルについて、食べあぐねているわたしに、はずんだ声で話しかける。

「あたしね、ほんつとに、ワクワクしてんだ。だって、じいちゃんちに行ったら、ふつうの暮らしができるんだよ。自分の部屋だって

……」

わたしが暗い顔をしていたのだろうか、カンナが、ぶつつと話すのをやめた。

「ごめん。こんな気持ち、アオイにはわかんないよね」

え？ わたしにはわからない？

わたしにとって、カンナは大切な友だちだった。カンナの気持ちもわかっているつもりだった。けれど、カンナは――。心のなかに、黒いあぶくがぶくりとういた。

「ふうん。そんなふうに、わたしのことを思ってたんだ」

「え。そうじゃないよ、そうじゃないけど」

④あわてるカンナを、わたしはふし目がちに見つめる。

ふつとカンナの顔つきが変わった。いつも教室で見えていた、あのツンとしたすまし顔。近寄りがたい霧^{ふん}囲^い気^き……。うん、やっぱり、アオイにわかるわけがないんだよ」

カンナはポケットをさぐり、百円玉を一枚出した。

「だってアオイは、あたしから見たらとってもめぐまれてるもん」
ひと息にそう言つて、⑤テーブルの上に百円玉をコトリと置く。

「こんだけしかないけど、タダで食べるのは気をつかうから」

ゆつくりと立ちあがり、よくひびく声で、「ごちそうさまでした！」と、お父さんに頭をさげる。

お父さんが、ぎこちない笑顔で声をかけた。

「カンナちゃん、またいつか、なっ」

「はい。ありがとうございます」

わたしを見ないまま、カンナはドアに向かう。

ボタン。空気が小さくふるえた。

わたしは、だまつてお皿を片づけた。お父さんはなにもきかない。わたしもなにも言わない。百円玉だけが、テーブルの上にそのまま残っていた。

その夜、よくねむれなくて、何度も何度も寝^ね返^{がえ}りをうった。

窓はあけていても、風はほとんど入ってこない。

「ねえ、エアコンつけようよ」

たまらず、勉強中のお姉ちゃんに言った。

だけど、「だめ」と、お姉ちゃんが首を横にふる。

「電気をむだに使わない！」

「お姉ちゃんだって、暑いと頭に入らないでしょ」

「玉田カレー、休業中なんだよ、わかつてる？」

「もう！」

タオルケットをけとばしながら、わたしはベッドをごろごろ転がった。

ほら、うちだつて貧乏^{びんぼう}じゃん。なにが、アオイはめぐまれてる、よ。カンナだつて、わたしのこと、ちつともわかってないくせに――。

心のなかでカンナに文句を言つて、顔をごしごしこすつた。

むしように泣きたかった。

わたしはカンナが大好きだったのに……。

やりきれなくて、はね起きた。そしてまた、ばたんと寝転がる。お姉ちゃんに、「うるさい！」とどなられながら、そんなことを何度
もくり返した。

(あんずゆき『アゲイン』)

(注1) スキッパー

問題文よりも前に、「スキッパーは、今、人気ナンバーワンのボーイズグループだ。ガリ勉のお姉ちゃんでさえ、
いつもその音楽をきいている」とある。

問一 傍線部①「あーあ、あーあ。」とありますが、このときアオイはどのような気持ちでしたか。

問二 傍線部②「気まずくて」とありますが、アオイが「気まずく」感じたのはなぜですか。

問三 傍線部③「それを見ていて鼻のおくがツンとした。」とありますが、それはなぜですか。

問四 傍線部④「あわてるカンナ」とありますが、なぜカンナは「あわて」たのですか。次の空欄に合うように七十字以内で答えな
さい。(字数には句読点等もふくみます。)

七十字以内

ことによって、思いもよらず、アオイからとげのある反応を示されたから。

問五 傍線部⑤「テーブルの上に百円玉をコトリと置く。」とありますが、このときのカンナの気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア アオイとは思った通りに話が運ばず、二人の仲をこじらせてしまったので、何もしないで仲直りはできないという思いがある。
イ アオイの家庭も自分の家庭と同様に生活の状況が厳しいことを考えたことで、わずかであつてもお金を払いたたいという思いがある。
ウ アオイとの環境^{かんきよう}の違いを実感し、気持ちに隔^{へだ}たりが生じたことで、一方的にごちそうされるわけにはいかないという思いがある。
エ アオイとは別に、おいしいカレーをふるまってくれたアオイのお父さんには、せめてものお礼をさせてほしいという思いがある。
オ アオイがおいしいカレーを毎日無料で食べられる恵^{めぐ}まれた立場にあることを、はつきりわからせてやりたいという思いがある。

【三】 次のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

- | | | | | | |
|----|-----------------------|---|---------------|---|------------|
| 1 | 道をさえぎっているショウガイを取りのぞく。 | 2 | 力士がドヒョウ入りをする。 | 3 | 職業はハイユウだ。 |
| 4 | 土地の争いをチョウテイする。 | 5 | 大阪までのリョヒを支払う。 | 6 | 都市がフツコウする。 |
| 7 | 人間のヨクボウはきりが無い。 | 8 | 紙のウラに書く。 | 9 | 身のチザむ思い。 |
| 10 | 空きかんをヒロウ。 | | | | |

評 点

【三】

[illegible]

ことによって、思いもよらず、アオイからとげのある反応を示されたから。

5

6	1
7	2
8	3
9 む	4
10 う	5